

各地で話題の病虫害

オオタコゾウムシ

学名: *Hypera punctata* (Fabricius)

本種はヨーロッパ原産で、アメリカ合衆国ではアルファルファタコゾウムシとともに、クローバーなどマメ科牧草の害虫として知られている。国内では、1978年に神奈川県で初めて確認され、その後関東から東北地方にかけて広い範囲でその発生が報告されていたが、近年関東以西でも発生が確認されるようになり、1997年には滋賀県のシロツメクサでも確認された。

成虫は体長が約8mmで、国内に分布するタコゾウムシの中では最も大きく、体の表面は黒っぽ



滋賀県病虫害防除所 小島俊彦氏提供

い鱗片で覆われている。卵は長径約0.9mmの長円形で黄白色を呈し、茎や葉の中に10~30卵ずつ産み付けられる。幼虫は緑色で背面に白い条があり、その両側が細く赤紫色の部分がある。4 齢幼虫の体長は9~14mmである。

本種の加害様式はアルファルファタコゾウムシのものとよく似ている。成虫では加害後、穴状の食害痕ができる。また、幼虫がクローバーに寄生すると葉の基方の葉脈付近に特徴的な丸い食痕を残す。

寄主植物はマメ科牧草が主で、現在、国内での本種による加害はシロツメクサからの報告があるが、今後他のマメ科牧草に対する被害、とりわけレンゲへの加害の可能性について注意を払う必要がある。

防除法としては、マラソン剤の散布が有効である。

イチゴセンチュウ

学名: *Aphelenchoides fragariae* (Ritzema Bos) Christie

本種による国内での被害は、1940年代後半に静岡県露地イチゴで初めて確認され、その後一部地域で発生が認められた。最近高知県のセンリョウや東京都のブーバルジア栽培ほ場、福岡県のリンドウからその被害が相次いで報告された。

本種は1890年に英国で発見され、現在北アメリカやヨーロッパ等において広く分布している。体長は0.4~0.8mmで細長く、口針は細く小さい。また、中部食道球が大きく、尾端に小突起があることも特徴の1つである。花芽や葉などの地上



高知県農業技術センター 高橋尚之氏提供

部に主に寄生し、ユリなどでは球根内で越冬する。

寄主植物は極めて広く、ユリ、ペゴニア、シャクヤク、アザレアなどの他、シダ類、サクラソウ科やキンポウゲ科など多くの観賞用植物に寄生する。また、ナズナなどの雑草にも寄生する。

症状は、地面に近い下位葉から現れ次第に高位葉に及び、本種の寄生葉では、葉脈を境に寄生部分が退色して黄化やモザイク症状を呈し、やがて、葉全体が黄色から褐色となる。被害の甚だしい場合は植物体が枯死することもある。

現在本種に対する登録農薬はないため、ほ場での防除対策として、栽培跡地での掘残し植物や雑草の除去を行う。また、枯葉中でも極めて長期間生存するため、落ち葉の焼却処分と土壤消毒が必要である。また、発生ほ場からの繁殖用の採穂等は行わない。

トルコギキョウえそ病

ウイルス名: *Lisianthus necrosis virus* (LNV)

1999年4月、長野県上山田町を中心としたトルコギキョウ栽培地帯で、葉に特徴的なえそ斑点と頂部が淡くなってねじれるなどの症状が見られた。長野県病虫害防除所の調査の結果、長野県では未記録のトルコギキョウえそ病であることがわかった。本病の国内における発生は、1987年に千葉県で確認されている。

生育初期に感染すると、下葉には輪紋状の大型のえそ病斑が認められることが多い。茎立ち後は頂部から数節の葉に白色のえそ斑点が生じる。また、開花期に発症すると、頂部はねじれ奇形となり葉色が淡くなってえそ斑点を生じる。多発時に



長野県農政部農業技術課 清水時哉氏提供

は発病株を中心に坪状に発病が拡大する。

本病の病原であるトルコギキョウえそウイルス(LNV)は土壌中に生息する鞭毛菌の1種のオルピディウム菌の遊走子により媒介されるため、灌水等により周囲に伝搬する。また、汁液伝染によっても伝搬する。

本病原ウイルスの寄主範囲は広いが全身感染する植物は、トルコギキョウの他センニチコウとニコチアナ・クレプランドイ(タバコの前種)が知られている。

防除法は、本病原ウイルスが土壌中のオルピディウム菌によって媒介されるため、土壌消毒や土壌中の植物残さの除去が効果的である。また、ほ場の滞水は本病の発生を助長するため、灌水等の水管理に注意することも必要である。

イチゴ角斑細菌病

学名: *Xanthomonas fragariae* Kennedy & King
英名: Angular leaf spot

1999年9月、神奈川県内の促成イチゴ栽培ほ場において、本病によると思われる病徴が発見された。東京農業大学及び神奈川県の調査により、本被害は *Xanthomonas fragariae* による病害であることが判明した。本病は1987年に国内初報告され(栃木県)、その後1996年に静岡で発生が確認され、病原菌が明らかとなった。

症状は、始め葉裏の葉脈に囲まれた部分に、水浸状の角張った小斑点が発生する。これが後に融合し褐変して葉枯れを起こす。湿度が高い場合には、病斑から細菌粘液が流出し、肉眼でも病斑が白く濁って見える。葉表も褐変するが、症状は各



静岡県病虫害防除所 池田雅則氏提供

種害虫の被害痕と類似し区別が難しい。葉柄、果梗やがくにも斑点を生じるが、果実や根部には直接発病しない。がくでの発病が激しくなると間接的に奇形裂果や腐敗などの被害が生じる。

本病原菌は主に汚染した苗により伝搬する。土壌中における残さでの生存はあるが、土壌伝染は確認されておらず、種子伝染もしない。寄主植物にはイチゴ属植物及び高山植物のキジムシロとキンロバイがある。

本病の防除は、病原菌に汚染されていない健全な苗を使用することが重要である。さらに発生ほ場での発病葉や発病株を除去し、銅剤を予防的に散布する。また、水を介して伝染するため、雨除け栽培を行い、頭上灌水しないなど対策がとられている。